平成19年の3階西病棟を振り返って

3階西病棟科長　　工藤　仁美

平成19年の3階西病棟は，例年に変わらず激しい入退院の繰り返しと，ベッド稼動の起伏の激しさの中で過ぎていった．

40床のベッドを産婦人科が762人，小児科863人の子どもたちが分け合って利用した．他空床利用の方36人，このベッド以外に生後間もない新生児の患児の入院は225人と計1886人が3階西病棟を利用した．

ベッド稼動率の波は入退院が激しく，10人が入院し10人が退院という120%越す日もあれば，入退院も無く50%代の日も少なくなかった．

産婦人科の入院のうち533人は，12週以降の流早産を含めた出産を目的とした入院であり，入院とならない健康新生児も約305名を数えた．その他は切迫流早産・少ないとはいえ卵巣・子宮の摘出手術，流産手術の日帰り入院も少なくなかった．

小児科の入院の約50%は呼吸器系の感染による炎症性疾患で，約20～30%は消化器系の感染によるものだった．その他目立った疾患としては，血液疾患・川崎病・腎疾患ほか神経系・発達障害等の検査目的の1日入院も多く見られた．ノロウイルス感染による胃腸炎患者も多数入院し，一瞬スタッフの中にも胃腸炎罹患者が発生し，蔓延の危機もあったがスタッフ全員の協力で速やかに終息し幸いだった．

診療担当は4月に大きな移動があり，産婦人科北村医長以下4名，小児科室野診療部長以下平野医長・佐藤医長を含め7名体制となった．

看護スタッフは年頭科長係長以下助産師10名・看護師10名・准看護師4名・看護助手2名の27名でスタートしたが，家族の転勤による退職・出産による育児休業，院内の移動等の入れ替わりも少なくなかったが，概ね27名の体制で一年間，3階西病棟の特徴を踏まえて看護を提供してきた．

平成19年度の病棟の目標は以下のとおりである．

1. 固定チームを生かし看護を継続する．
2. クリティカルパスの種類を増やし活用する．
3. 院外の研修に1回以上は参加しよう．
4. 各々が提供したい看護を振り返り，自分のキャリアアップを図る．

それを具体的にするための活動としては，

1. 産婦人科外来へ，妊婦褥婦の保健指導目的の助勤をおこなう．
2. 褥婦に対する退院後に“ひと言電話訪問”実施100%をめざす．
3. クリティカルパスを10個以上活用できる．
4. 見られ・評価される自分の看護に責任を持つ．（写真の掲示・病室前の氏名表示）
5. 3分間スピーチを実施する．（自分の看護に対するおもいを自分の言葉で語る．）
6. 無駄なく無理なく安全のために業務改善に勤める．
7. 話し合いを頻繁に持って常に意思の疎通を図る努力をする．

（コミュニケーションの重要性を再認識し，タイムリーに改善を進める．）

達成できていない目標は少なくないが，産科チームの念願であった母児同室に取り組み，小児科チームでも，スタッフ自身が情報収集・資料作り自主的な学習会の開催プレパレーション導入への準備作業など，新しい動きも多く見られる一年だった．また，全国学会でも2例の発表があった．9月27日全国自治体病院学会において小児科チームで研究の“点滴固定法について”を阿部亜津沙が，10月全国母性衛生学会では産科チームのメンバー星純江が“新生児の血糖検査について”の発表を行なった．医療界は急激に多彩に変化し，それに乗り遅れそうになりながらも，スタッフ全員で協力しながら，平成20年も一日一日看護を提供していきたい．